

研 究

母親の育児に関する意識および行動の変化

—保育所での地域子育て支援事業への参加をととして—

野 原 真 理

〔論文要旨〕

「保育所開放」は地域の母子が保育所の子どもたちと職員と一緒に遊ぶ(地域子育て支援)事業である。本研究は、この事業をととして母親の育児に関する意識および行動の変化を明らかにすることを目的とするものである。保育所開放に参加している61名と参加していない58名の母親に対して、2000年5～6月に質問紙調査を実施し、そのうち33名および32名が約6ヵ月後に追跡調査された。

その結果、保育所開放参加者は就園前の第一子を持つ親が多かった。また調査対象者119名の母親の育児に関する意識および行動は、因子分析の結果、4因子で説明された。すなわち、満足感、自立支援、社会性、柔軟性に関する因子である。保育所開放参加者は、特に「社会性に関する因子」の改善がみられた。したがって保育所開放の場が、母親の社会性の促進に寄与することが示唆された。

Key words : 母親, 育児意識, 育児行動, 保育所, 子育て支援

I. 緒 言

わが国の子育て支援は、当初少子化対策の取り組みであり、延長保育や乳児保育の実施など仕事と子育ての両立支援が主な内容であった¹⁾。しかし、新エンゼルプラン(2002)からは、保育所が地域子育て支援センターの役割をもち、家庭で育児する専業主婦も含めた地域全体に対して、地域子育て支援事業を実施していくことが求められている。この地域子育て支援事業の1つに保育所開放がある。保育所開放は、1994年に全国64ヶ所で施行された「地域子育てモデル事業」に端を発しているが、保育所の日常の保育時間内に、入所児のほかに、周辺地域の親子に保育所を開放し、遊びや生活を経験する場を提供するものである。参加者は自由に所庭や保育室での遊びの中に入ることができ、

日常の保育活動を見ることができる。

この保育所開放に関しては、実践報告が数多く見られており、野坂²⁾は、保育所の利用状況として、3歳未満児の親が相談に訪れていること、また、他の親との情報交換ができ、しかも、子どもを安全に遊ばせられる場が得られることで強い満足度を覚えていると述べている。

野原³⁾は、保育所開放について、母親の参加動機として「同年代の子どもと遊ばせたい」、「子どもの遊ばせ方を知りたい」、「保育所を知りたい」ということが多かったが、参加後は「子どもの発達や生活がわかる」、「職員の接し方が参考になる」など、母親は子どもの発達や接し方などを含む遊び以外の良さを感じていることを指摘している。また、参加者自身が保育所開放の参加によって、育児意識や家庭での育児行動がどう変化したかを縦断的に調査した結果で

The Change of Maternal Feelings and Behaviors of Childrearing

[1825]

— Through the Participation in Childrearing Support of Day Nursery in Community —

受付 06. 5. 9

Mari NOHARA

採用 07. 1. 10

聖母大学看護学部看護学科地域看護学(保健師/教員)

別刷請求先: 野原真理 聖母大学看護学部看護学科地域看護学 〒161-8550 東京都新宿区下落合4-16-11

Tel : 03-3850-0171 Fax : 03-5982-9336

は、母親の社会性の促進に寄与することが示された⁴⁾。

本研究では、さらに保育所開放に参加していない母親との比較から、保育所開放に参加することが、母親の育児意識および行動にどのような変化をもたらしたかについて検討した。

II. 対象および方法

1. 地区の概況および保育所開放の状況

今回の対象は、東京近接A市のS保育所である。A市は、人口約47万人で、S保育所のあるS地区は、平成17年4月現在人口が43,836人、出生率は8.8%（人口千対）、65歳以上人口は10.3%。一戸建てとアパート・マンションといった集合住宅が混在し転出入が多い。全国と比較して高齢化率はそれほど高くなく、都心に通勤する子育て世帯が多い地区である。

S保育所の保育所開放は、毎週火曜日午前中に定例で開催しており、参加親子は職員や入所児と一緒にいろいろな遊びを楽しむことができ、随時子育てについての悩みを職員に相談することができる。職員は入所児の保育をしながら参加親子と関わっている。月に1回保育士によるミニ講座が開かれ、「手遊び」、「体操」、「作って遊ぼう」など、家に帰っても親子で楽しめる遊びを紹介している。また、年2回開催している「子育てトーク会」では、職員も参加して、子育ての悩みをみんなで話し合い、アドバイスをもらうことができる。保育所開放については、広報や保健事業の中で紹介されている。

2. 対象および方法

今回の対象者は、S保育所の保育所開放に参加している母親61名（以下参加者）と参加していない母親58名（以下非参加者）である（図1）。

S保育所では保育所開放の参加者を随時受け入れているが、ほとんどの参加者が4月からほぼ1年間の利用期間となっている。

参加者の調査は、ベースライン調査として、利用開始間もない2000年5月～6月に保育所開放に参加した母親58名に筆者が主旨とプライバシー保護について説明したうえで調査票を配布し、自己記入してもらい回収した。

非参加者は、参加者の調査と同時期に、S

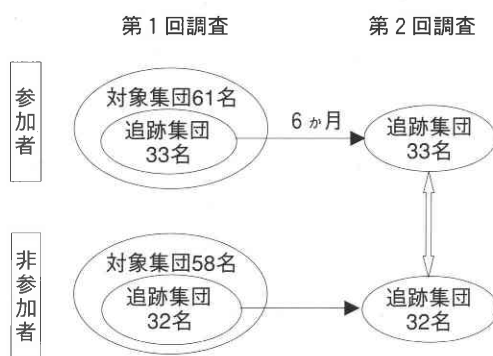


図1 調査対象者フローチャート

地区を管轄するK保健福祉センターで実施している1歳6か月児健康診査に来所した母親153名に対して同様に説明したうえで調査票を配布し、郵送・留め置き法での返信を依頼した。返信のあった者は、66名（回収率43.1%）であった。そのうち「保育所開放に参加している」と記載のあった母親3名は参加者にいた。また、家庭で育児をしている母親を対象者とするために、母親が就労しており、子どもを保育所に預けている5名を除外した。

次に、保育所開放の効果をみるために、約半年後の11月下旬に第2回調査を実施した。参加者では、第1回調査者61名のうち住所不備のあった2名を除き、59名に対して郵送・留め置き法で行った。回収は33名（55.9%）となった。非参加者では、参加者の調査と同時期に第1回調査者58名に対して郵送・留め置き法で行った。回収は32名（55.1%）となった。

調査項目は、母親の育児意識および行動に関する52項目からなる。まず、母親の育児意識については、大日向⁵⁾の母親の役割受容に関する14項目（積極的・肯定的意識7項目と消極的・否定的な意識7項目）、柏木ら⁶⁾の育児をととした母親の意識変化の認識に関する25項目（柔軟さ、自己抑制、視野の広がり、生きがい・存在感、自己の強さの5因子から構成）から抽出された15項目、野原³⁾の保育所開放に参加して得られたメリットとして有意差の見られた3項目を加え32項目とした。また、母親の育児行動については、堤⁷⁾の子どもが発達に応じた関わり、しつけに関すること、子どもとの向き合い

方、子育ての姿勢に関する20項目である。全体として52項目からなる調査票を作成した。

なお、これら52項目の調査項目について、調査前に、S保育所の主要スタッフ2名と、K保健福祉センターの保健師2名に対して、保育所開放の参加母親、または1歳6か月児健康診査に来所する母親への適正な質問事項であるかについての意見を求め、その内容確認と賛同を得たうえで本調査を実施した。

調査票は、第1回調査・第2回調査とも全く同じである（フェイスシートは第1回調査に入れた）。そして、全項目とも「かなり感じる（行動する）」から、「まったく感じない（行動しない）」までの5段階評定とし得点化した。

解析にあたっては、構造的な検討を加えるために因子分析を行った。まず、52項目について、有意な相関があり内容的に類似した項目はまとめ29項目にしぼり込んだ。次にこの29項目について、第1回調査者119名の結果に基づき因子分析（主因子法、バリマックス回転）を施行した。そして、共通性や因子負荷量（0.40以上）を見ながら項目をしぼった結果、表3の12項目になり、信頼係数は0.74となった。さらに、参加者、非参加者の母親の育児意識および行動の変化を検討するために、追跡調査者33名（参加者）、あるいは32名（非参加者）における第1回調査と第2回調査の結果について、各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値を算出比較し、対応のあるt検定による有意性を検討した。

次に、追跡調査者について、参加者と非参加者とを比較するために、第1回調査と第2回調査での、各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値について、独立したt検定による有意性を検討した。

なお、解析はSPSS11.5J for Windowsで行った。

Ⅲ. 結 果

1. 対象者の属性

参加者の第1回調査対象者61名（対象集団）は、子どもの平均年齢は1歳10か月（ ± 1 歳1か月）、母親は現時点で就労していない専業主婦であり、平均年齢は32.2（ ± 4.6 ）歳だった。連れてくる子どもの約7割が第一子であり、現

時点での子どもの人数は1人が67.2%、2人が26.2%、全体の約9割が核家族だった。日中の子どもの世話は、9割以上が母親である。居住年数は5年未満が6割以上を占めており、住居形態は集合住宅が8割以上と多い（表1）。

また、育児困難時の相談相手（複数回答）は、夫が約8割と最も多く、近隣の友人は3割台、近所の人は1割以下と低い。

なお、追跡調査者33名の属性についても、第1回調査者全体（対象集団）の結果と有意な差はみられなかった。

同様に、非参加者の第1回調査対象者58名（対象集団）は、子どもの平均年齢は1歳6か月（ ± 0.9 か月）、母親は現時点で就労していない専業主婦であり、平均年齢は30.9（ ± 3.6 ）歳だった（表2）。

なお、追跡調査者32名の属性についても、第1回調査者全体（対象集団）の結果と有意な差はみられなかった。

また、参加者と非参加者では、子どもの年齢、母親の年齢についても有意な差はみられず、記載された住所より、S保育所を中心として800m圏内にあり、育児環境についても同様の条件であった。

2. 育児に関する意識および行動の因子構造

育児に関する意識および行動の12項目について、因子分析の結果4因子が抽出された（表3）。

第1因子は、「子育ては楽しい」、「親であることに充実感を感じる」、「子どもを見てると元気づけられる」という3項目からなり、「満足感」と考えられる。

第2因子は、「子どもにことばをとおして分かるように説明する」、「子どもが自分で決められるようにサポートする」、「順番や『貸して』など社会のルールを教えている」、「子どもの発達に応じた生活習慣を身につけさせている」という4項目からなり、子どもへの社会規範の教育および子どもの自立を促す関わりと考えられ、「自立支援」と解釈できる。

第3因子は、「子育てをとおして近所づきあいをする」、「子育て仲間や子どもといるのが楽しい」、「公園や散歩によく連れて行っている」という3項目からなる。この因子は、子どもお

表1 対象者の属性 (参加者)

項 目		対象集団 n=61		追跡集団 n=33	
連れてくる子どもの出生順位 (対象集団の子どもの人数 n=71) (追跡集団の子どもの人数 n=37)	第一子	50	70.5%	28	75.7%
	第二子	17	23.9%	7	18.9%
	第三子	4	5.6%	2	5.4%
複数の子どもを連れてくる母親		10	16.4%	4	12.1%
子どもの平均年齢		22.2±12.1か月 (範囲6～71か月)		22.8±13.6か月 (範囲6～71か月)	
子どもの性別	男	39	55.0%	25	67.6%
	女	32	45.0%	12	32.4%
母親の平均年齢		31.2±4.7歳 (範囲23～44歳)		32.2±4.6歳 (範囲25～44歳)	
父親の平均年齢		31.8±8.5歳 (範囲23～46歳)		33.3±5.0歳 (範囲25～44歳)	
子どもの人数	1人	41	67.2%	24	72.8%
	2人	16	26.2%	8	24.3%
	3人	4	6.6%	1	3.0%
家族形態	核家族	54	91.5%	29	87.9%
	二世帯家族	7	8.5%	4	12.1%
住居形態	一戸建て	9	14.8%	4	12.1%
	集合住宅	52	85.2%	29	87.9%
居住年数5年未満		38	62.3%	22	66.7%
日中の子どもの世話は母親である		58	95.1%	31	93.7%

表2 対象者の属性 (非参加者)

項 目		対象集団 n=58		追跡集団 n=32	
子どもの出生順位	第一子	40	70.0%	25	74.3%
	第二子	15	25.9%	7	20.0%
	第三子	3	5.1%	2	5.7%
子どもの平均年齢		18.7±0.9か月 (範囲18～23か月)		18.5±0.8か月 (範囲18～22か月)	
子どもの性別	男	24	41.4%	18	51.4%
	女	34	58.6%	17	48.6%
母親の平均年齢		30.9±3.6歳 (範囲23～40歳)		30.5±3.5歳 (範囲23～40歳)	
父親の平均年齢		33.4±4.2歳 (範囲26～49歳)		32.1±3.5歳 (範囲26～41歳)	
子どもの人数	1人	40	70.0%	26	74.3%
	2人	14	24.1%	7	20.0%
	3人	4	6.9%	2	5.7%
家族形態	核家族	50	86.2%	29	90.6%
	二世帯家族	8	13.8%	3	9.4%
住居形態	一戸建て	14	24.1%	8	25.0%
	集合住宅	44	72.9%	24	75.0%
居住年数5年未満		29	50.0%	21	65.6%
日中の子どもの世話は母親である		57	98.3%	31	96.9%

表3 因子分析

質 問 項 目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
1) 子育ては楽しい	0.827	0.080	0.065	0.170
2) 親であることに充実感を感じる	0.722	0.113	0.150	0.188
3) 子どもを見ていると元気づけられる	0.707	0.115	0.101	-0.016
4) 子どもにことばをとおして分かるように説明する	0.025	0.896	0.159	-0.018
5) 子どもが自分で決められるようにサポートする	0.202	0.631	-0.141	0.151
6) 順番や「貸して」など社会のルールを教えている	0.043	0.562	0.054	0.171
7) 子どもの発達に応じた生活習慣を身につけさせている	0.187	0.403	0.354	0.086
8) 子育てをとおして近所づきあいをする	-0.055	-0.141	0.761	0.051
9) 子育て仲間や子どもといるのが楽しい	0.217	0.099	0.670	0.156
10) 公園や散歩によく連れて行っている	0.194	0.277	0.528	0.191
11) 考えが柔軟である	0.115	0.129	0.090	0.833
12) 他人に対して寛大になった	0.175	0.195	0.304	0.626
因子の寄与率	15.9	15.6	13.5	10.6
累積寄与率	15.9	31.5	45.0	55.6
Cronbach's α 係数	0.81	0.73	0.69	0.74
全体の Cronbach's α 係数 0.74				

第1因子：満足感
第2因子：自立支援

第3因子：社会性
第4因子：柔軟性

よび育児をとおして、近所づきあい、子育て仲間との交流の楽しさ、家に閉じこもらない周辺環境の柔軟な受け入れと考えられ、いわゆる「社会性」と解釈できる。

第4因子は、「考えが柔軟になった」、「他人に対して寛大になった」という2項目からなり、柔軟な考え方を基本に、他人への寛大さ、いわゆる「柔軟性」と考えられる。

全体の累積寄与率は55.6%と妥当な値が得られ、各因子の寄与率は10.6%から15.9%といずれも5%以上であった。また、各因子の信頼係数は、ほとんどが約0.7以上と高く、全体の信頼係数は0.74であった。

次に、保育所開放の効果を検討するために、参加者の追跡集団の第1回調査と第2回調査の結果から、各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値を比較した(表4)。

参加者の第1回調査における追跡集団の結果は、全体(対象集団)の結果と比較して、各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値とも有意差がなかった。

参加者の追跡集団の第1回調査と第2回調査の結果をみると、第1因子(満足感)、第2因

子(自立支援)、第4因子(柔軟性)とも、各項目の評定得点の平均値および因子得点の平均値はほとんど同じであり有意差はない。

しかし、第3因子(社会性)は、第1回調査に対して第2回調査では、3項目とも評定得点の平均値が高い傾向がみられ、特に「子育てをとおして近所づきあいをする」という項目では3.70から4.09へと有意な増加を示した。しかも、3項目の因子得点の平均値も、7.69から8.02へと有意な増加を示している。

同様に、非参加者の第1回調査における追跡集団の結果は、全体(対象集団)の結果と比較して、各項目の評定得点の平均値および各因子得点の平均値とも有意差がなかった(表5)。

非参加者の追跡集団の第1回調査と第2回調査の結果をみると、第2因子(自立支援)、第3因子(社会性)、第4因子(柔軟性)とも、各項目の評定得点の平均値および因子得点の平均値はほとんど同じであり有意差はない。

しかし、第1因子(満足感)は、第1回調査に対して第2回調査では、3項目とも評定得点の平均値が低い傾向がみられ、しかも、3項目の因子得点の平均値も、9.37から8.71へと有意

表4 各項目の得点および因子得点 (参加者)

質 問 項 目	対象集団 n=61	追跡集団 n=33	
		1 回目	2 回目
第1因子 (満足感に関する因子)			
1) 子育ては楽しい	3.93	4.00	4.03
2) 親であることに充実感を感じる	4.10	4.03	3.82
3) 子どもを見てしていると元気づけられる	4.43	4.38	4.24
因子得点の平均値	9.34	9.32	9.08
第2因子 (自立支援に関する因子)			
4) 子どもにことばをとおして分かるように説明する	3.77	3.79	3.85
5) 子どもが自分で決められるようにサポートする	3.34	3.36	3.45
6) 順番や「貸して」など社会のルールを教えている	4.26	4.06	4.18
7) 子どもの発達に応じた生活習慣を身につけさせている	3.67	3.67	3.58
因子得点の平均値	9.36	9.28	9.40
第3因子 (社会性に関する因子)			
8) 子育てをとおして近所づきあいをする	3.52	3.70	4.09 *
9) 子育て仲間や子どもといるのが楽しい	4.02	3.97	4.15
10) 公園や散歩によく連れて行っている	4.08	4.21	4.27
因子得点の平均値	7.53	7.69	8.02 *
第4因子 (柔軟性に関する因子)			
11) 考えが柔軟になった	3.59	3.52	3.42
12) 他人に対して寛大になった	3.43	3.39	3.48
因子得点の平均値	5.10	5.03	5.05

* $P < 0.05$

注) 評定得点: 5段階評価 (1点: まったく感じない・行動しない, 2点: あまり感じない・行動しない, 3点: 少し感じる・行動する, 4点: わりに感じる・行動する, 5点: かなり感じる・行動する)

な低下を示した。

参加者と非参加者の対象集団における第1回調査の評定得点の平均値と因子得点の平均値はほとんど同じであり有意差はない。同様に追跡調査者の参加者と非参加者の第1回調査の評定得点の平均値と因子得点の平均値はほとんど同じであり有意差はなかった。しかし追跡調査者の参加者と非参加者の第2回調査では, 第1因子の因子得点の平均値 ($p < 0.01$) と第1因子の3項目のうち「育児は楽しい」($p < 0.01$), 「子どもを見てしていると元気づけられる」($p < 0.05$)の評定得点の平均値が, 参加者について有意に高かった。

IV. 考 察

1. 対象者の特性

参加者の第1回調査対象者61名 (対象集団) は, 現時点で就労していない専業主婦であり,

保育所開放に連れてくる子どもは, 1~2歳が多く, 年齢範囲は生後6か月から5歳9か月と入所児と同様に幅広い年齢層であった。

母親の平均年齢は31.2±4.7歳であるが, 年齢範囲は23歳から44歳と幅広い年齢層であった。第二子以降の子どもを連れてくる者が3割, 複数の子どもを連れてくる母親が1割以上おり, 保育所はどの年齢の子どもも連れてくることのできる施設となっていることが示唆される。

非参加者の第1回調査対象者58名 (対象集団) は, 子どもの平均年齢は18.7 (±0.9) か月, 母親は現時点で就労していない専業主婦であり, その他の育児状況においても, 参加者の特性と同様と考えられる。

2. 育児に関する意識および行動の因子構造

育児に関する意識および行動の12項目は4因子で構成されていることが確認された。

表5 各項目の得点および因子得点（非参加者）

質 問 項 目	対象集団 n = 58	追跡集団 n = 32	
		1 回目	2 回目
第1 因子（満足感に関する因子）			
1) 子育ては楽しい	4.00	4.00	3.66
2) 親であることに充実感を感じる	4.11	4.09	3.78
3) 子どもを見ていると元気づけられる	4.44	4.41	4.19
因子得点の平均値	9.40	9.37	8.71 *
第2 因子（自立支援に関する因子）			
4) 子どもにことばをとおして分かるように説明する	4.00	3.75	4.00
5) 子どもが自分で決められるようにサポートする	3.53	3.41	3.50
6) 順番や「貸して」など社会のルールを教えている	4.29	4.19	4.25
7) 子どもの発達に応じた生活習慣を身につけさせている	3.85	3.81	3.53
因子得点の平均値	9.71	9.24	9.60
第3 因子（社会性に関する因子）			
8) 子育てをとおして近所づきあいをする	3.71	3.69	4.16
9) 子育て仲間や子どもといえるのが楽しい	4.17	4.13	4.16
10) 公園や散歩によく連れて行っている	4.12	4.06	3.88
因子得点の平均値	7.72	7.72	7.99
第4 因子（柔軟性に関する因子）			
11) 考えが柔軟になった	3.50	3.44	3.25
12) 他人に対して寛大になった	3.41	3.13	3.16
因子得点の平均値	4.97	4.82	4.68

* $P < 0.05$

注) 評定得点: 5段階評価 (1点: まったく感じない・行動しない, 2点: あまり感じない・行動しない, 3点: 少し感じる・行動する, 4点: わりに感じる・行動する, 5点: かなり感じる・行動する)

第1 因子は「満足感」であり、親としての自覚を示す因子であると考えられる。

参加者では、この第1 因子に含まれる3 項目の評定得点の平均値も因子得点の平均値も、保育所開放の参加前後において有意な変化はなかった。しかし非参加者は、6 か月を経過して3 項目の評定得点の平均値が低い方に変化し、因子得点の平均値は有意な低下を示した。さらに、参加者と非参加者の比較では、第1 回調査で有意差がみられなかったが、第2 回調査では有意差がみられた。参加者の調査結果から、育児に関する満足感は、日常の育児をとおして母親自身が主観的に感ずるものであり、週1 回の保育所開放への参加によって変化するものではないと考えられた⁷⁾。しかし、非参加者の調査結果と関連させると、保育所開放に参加することが、親としての自覚を維持していくことや育児をポジティブに捉えることに寄与しているこ

とを示唆していると考えられる。

第2 因子は「自立支援」といえるが、参加者では、この第2 因子に含まれる4 項目の評定得点の平均値も因子得点の平均値も、保育所開放の参加前後において有意な変化はなかった。

子どもの自立支援に関する対応は、保育士にとって大切な対応方法とされている⁸⁾。したがって、保育所開放に参加する母親は、保育士のこのような対応を学習し、行動変容への動機づけになるのではないかと考えたが、その結果は得られなかった。非参加者においても同様の結果が得られたことは、子どもの自立支援を促す育児のあり方は、重要かつ本来的な親としての関わり方であり、保育士の影響によって、新たに認識させられるものではないことを示唆している。また、多くの母親が、基本的な生活習慣を身につけさせることや良好な友達関係をつくること、集団の中で社会性を身につけさせる

ことなどについて、保育所開放参加の有無に関わらず、子育ての中で大切にしていることが考えられる。

第3因子の「社会性」は、育児をとおして、親自身の社会性が拡大・向上していくことを示すものと考えられる。この第3因子は、参加者において、3項目とも改善の傾向があり、特に「子育てをとおして近所づきあいをする」では有意な改善がみられた。しかも、因子得点の平均値も有意な増加がみられた。つまり、保育所に出向くことが、家庭で母子が孤立してしまいがちな環境から抜け出る機会となっていることが考えられる。保育所開放への参加動機は、「同年代の子どもと遊ばせたい」、「子どもの遊ばせ方を知りたい」、「保育所を知りたい」というような情報収集型が多いことが指摘されているが³⁾、参加後徐々に、公園に出向く機会も増えて、子育て仲間や子どもといえるのが楽しいと感じたりするなど、親の社会性の拡大・向上がみられるようになったと考えられる。母親は育児をとおして社会化のプロセスを踏むといわれるが⁹⁾、保育所開放は母親の社会化の一翼を担っていると考えられる。

一方、非参加者においては、有意な改善はみられていない。また参加者と非参加者の比較においても、第1回調査、第2回調査とも有意な差は認められなかった。

非参加者において、調査期間である1歳6か月から2歳にかけては、子どもの活動範囲も広がり、言葉をとおしたコミュニケーション能力の獲得や理解力が進歩する時期である。つまり、子どもの成長とともに母子の行動範囲の広がりや母親のネットワークの広がりを意味する因子として抽出されたと考えられる。

最近の母親像として、育児に関する情報はたくさんもっているが、子ども時代に遊びの経験が少なく、世代を超えた人づきあいが不足している特性があるといわれている¹⁰⁾。対象者は参加者も非参加者においても、第一子をもつ母親が7割を占めることから、親子関係を基本として、この因子が改善することが、家庭で母子が孤立してしまいがちな環境から抜け出すことにつながると考えられる。昨今、子どもと母親が安心して過ごせる公園などの安全な場所が地

域からなくなったといわれる現状の中で、保育所開放の意義がさらに大きくなったと考えられる。

第4因子の「柔軟性」は、親の性格特性を示す因子と解釈でき、親の性格特性は育児に関する意識や行動に影響を及ぼす因子として抽出されたものと考えられる。この第4因子は、第1因子と同様に、項目の評定得点の平均値も因子得点の平均値も、参加者の保育所開放の参加前後において、有意な変化はなかった。このことは、柔軟性といった親の性格特性は、これまでの長い生活歴の中で培われてきたものであり、保育所開放という短期的な生活体験ではなかなか変容しないことが反映されているものと考えられる。

本研究の結果から得られた保育所開放の意義として、親としての自覚を維持していくことや育児をポジティブに捉えることに寄与していること、また母親の社会性を促進させる傾向があることが示唆された。

しかし、その他の因子に関しては、保育所開放の参加前後では母親の変化がみられなかった。つまり、有意差のみられなかった因子は、親の性格特性など親の人間性に関する因子であり、これらの因子は、親が親となっていく過程において、学校教育や社会教育の分野も重要な役割を担っていると考えられる。

なお、今回、保育所開放への参加によって、特に第3因子(社会性に関する因子)において、有意な変化があった。しかし、育児をとおして、母子ともに発達・変化することが指摘されており¹¹⁾¹²⁾、今後は、発達段階に応じて追跡調査や事例研究などを含めたさらなる検討が必要であると考えられる。

また、保育所開放という事業は、参加する母親が保育所という「場」を利用するとともに、専門職による「介入」でもあるため、それらを統合した検討、または、「場」と「介入」を区別した検討が必要であると考えられる。

V. ま と め

1. 地域子育て支援事業の1つである、保育所開放の参加者は1～2歳の第一子をもつ母親が多く、保育所は6か月～5歳9か月までの

幅広い年齢層の子どもが利用できる施設となっている。

2. 子育て中の母親の育児に関する意識および行動は、「満足感」、「自立支援」、「社会性」、「柔軟性」の4因子で構成される。
3. 参加母親の育児に関する意識および行動で、保育所開放の参加をとおして変化したのは、「社会性に関する因子」とその中の「子育てをとおして近所づきあいをする」という項目である。
4. 保育所開放に参加することは、「(育児に対する)満足感に関する因子」や「社会性に関する因子」に良い効果がある可能性が示唆される。

謝 辞

本研究をまとめるにあたり、調査にご協力くださった皆さま、S保育所、K保健福祉センターのスタッフの皆さま、筑波大学人間総合科学研究科長崎 勤先生、熊谷恵子先生、女子栄養大学保健管理栄養学研究室宮城重二先生に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 汐見稔幸. 国・自治体における子育て支援と保育の施策についての動向. 発達 No.101. Vol. 26. 2005: 2-6.
- 2) 野坂 勉. 保育所・子育て支援活動の課題と展望. 保育所地域子育て支援活動に関する調査研究報告書. 日本保育協会 1995: 155-161.
- 3) 野原真理. 地域における保育所の育児支援に果たす役割. 公衆衛生研究 1999: 47-3: 276-277.
- 4) 野原真理. 宮城重二. 保育所における地域子育て支援事業への評価～母親の育児に関する意識および行動の変化～. 女子栄養大学紀要 2005: 第36号: 63-69.
- 5) 大日向雅美. 母性の研究. 東京: 川島書店. 1984: 136-169
- 6) 柏木恵子. 若松素子. 「親となること」による人格発達～生涯発達の視点から親を研究する試み～. 発達心理学研究 1994: 5-1: 72-83.
- 7) 堤マサエ. 母性形成過程の社会学的研究. 山梨県立女子短期大学紀要 1985: 18: 181-203.
- 8) 保育所保育指針. 東京: 日本保育協会, 2004: 12-13.
- 9) 船橋恵子. 堤マサエ. 母性の社会学. 東京: サイエンス社, 1995: 181-185.
- 10) 鯨岡 峻. <育てられる者>から<育てる者>へ. 東京: 日本放送出版協会, 2002: 236-245.
- 11) 柏木恵子. 古澤頼雄. 宮下考広. 発達心理学への招待. 東京: ミネルヴァ書房, 1996: 186-193.
- 12) 船橋恵子. 堤マサエ. 母性の社会学. 東京: サイエンス社, 1995: 82-127

[Summary]

"Hoikusho-kaiho" is one of childrearing support activities of day nursery in community. Using the activity, mothers and children in community can participate in regular activity of day nursery. The purpose of this study is to clarify the change of maternal feelings and behaviors of childrearing in the "Hoikusho-kaiho" activity. 61 mothers, who have participated in the activity compared with 58 mothers, who have not, were conducted using a questionnaire survey in May and June 2000 and 33 of the former, and 32 were the latter followed after about six months. Their feelings and behaviors of childrearing before and after the "Hoikusho-kaiho" activity were compared using factor analysis.

The results were as follows. Most of the mothers surveyed have their firstborn children before attending kindergarten.

The scale of maternal feelings and behaviors of childrearing was consisted of four factors; feelings of satisfaction in childrearing, support for independence, socialization, flexibility,. Of these factors, especially, the score of socialization factor was significantly higher after than before "Hoikusho-kaiho"

That suggests that "Hoikusho-kaiho" activity in community could improve socialization of mothers on childrearing.

[Key words]

Mother, Feelings of Childrearing, Behaviors of Childrearing, Day Nursery, Childrearing Support